

低学年を担当してみても（10年間の振り返り）

佐藤 治夫

せっかく10年連続で低学年を担当させていただきましたので、記憶が冷めないうちに、みなさんの参考になればと思い、以下に整理します。

言うまでもありませんが、「こうせよ」というマニュアルではありません。

1. 最初に最も重要なこととは

1年生、サッカーをやる上で最初に最も重要なことはボールを足で扱えること、スキルを身につけることだ、と考えて着手しましたが、これがうまく行きませんでした。

まだ、サッカーをやろうと思っていない子が多数を占めていたのです。

大人でも子どもでも、人は、見たいものしか見えず、聞きたいことしか聞こえない、の格言どおり。もちろんやる気のある子もいて、その子をほめて他の子にもやらせようとしたが、練習がつまらなくなっていました。オランダ流に言えば乾いた練習。

最初はスキルだ、アジリティだ、闘争心だ、と様々な考えがあると想像しますが、私にとっての結論は「最初は何でもよい、やりたいスタイルでやればよい」とし、「しかし何もしないことだけは許さない」としました。

Kセイはスピードを誇示したかった、Sエイは相手を打ち負かしたかった、Rイチローはウケをねらっていた、Nブは静かに自分が追求することを考えていた。少し遅れてYセイが入ってくると、みなそれぞれが自分の方向を考え始めたように思えた。

誰かを英雄にして誰かをけなしていたら、あの学年はどうなっていたのだろうかと思う。

この数年前にAツキの学年を低学年で担当し、数年ぶりに担当した1年生。この学年から10年間が始まった。

関前を好きになってもらうこと、サッカーを好きになってもらうこと。

これが最初に最も重要なことなんだろうと今は考えています。

2. 闘争心

サッカーはゴールの奪い合いであり、そのためボールの奪い合いが基本となる。

しかし半数以上の子どもたちは「奪い合い」を経験していない。おもちゃの奪い合い、食べ物の奪い合い、母親の奪い合い、など、かつて我々が「子どもの基本動作」みたいにやってきた奪い合いを経験していない。

だから、ドリブルのワザを覚えるものの、ボールを奪う姿勢がない。

これには困った。

低学年を通じて、あるいはそれ以上になっても、とにかく「奪え！」「当たれ！」「取れば

低学年を担当してみても（10年間の振り返り）

佐藤 治夫

チャンス！」と叫び続けてきた。

しかし1年生は叫んでも動かない。そもそも奪い合いどころか競い合いすら経験していない。

そこで考えたのが、接触プレーはないものの、速さを競う練習内容である。

ヨーイドンでドリブル開始、最初にゴールに入れた人の勝ち。これをやり、さらにリレー形式を取り入れたら、ようやく勝敗にこだわる姿勢が芽生え始めた。

そうすると、ミニゲームでもボールの奪い合いが出てくるようになった。

まず、ゆっくりでもスキルを身につけ、次にそれを速くできるか、さらに相手がいてもできるか、という順序で教えようと当初は考えていたのだが、最も重要なことは「そのスキルを身につけたいと思う」ことであり、それはボールを奪われたいという目的があって初めて実現することであり、ボールの奪い合いに勝利したいという動機がなければスキルは形だけのものになってしまう。

3. 名前

練習ではできるだけ子どもの名前を叫ぶように呼ぶことにした。

「Dゴ、それすごくてね？」

「Kセイ、頭いい！」

「Yイ、上手くなってる！」

大人でもそうだが、親密になる最速の方法は相手の名前を呼ぶこと。そして、大声で自分の子どもの名前が呼ばれた親は、それまでおしゃべりに夢中になっていたとしても、必ず注目する。記憶に残る。自宅で会話ができる。

4. 否定しない

大人でも子どもでも否定されて嬉しい人はいない。しかし指導者は、導くためには「そうでない方向」を否定したくなるものだろう。

例えば「そんなんじゃないだ」「バカ」「それは違う」など。

子どもに気づかせることを重視すれば、否定という方法ではないはずだ。もっと工夫できる。

否定は、えてして自分の価値観を押しつけることにつながる。子どもはそれに気づく。親も気づく。そして静かに関前を去って行く。

低学年を担当してみても（10年間の振り返り）

佐藤 治夫

5. つながり

低学年の練習は、グラウンド当番を2年生の親1名と、1年生の親1名という編成にした。1年生の親が教えてもらうためだが、実際には2年生の親といっても、1年生のときにグラウンド当番を1回か2回やっただけで、とても教えるレベルにはない。できるだけ、グラウンド当番に来てくれた親同士をつなげる工夫を、お茶でも飲みながらやった。不思議なことに私が朝礼台に向かう日の当番は、いつも美人だった。別名、銀座8丁目。

6. 3年生に向かって

3年生になると土曜も日曜もあるし、火曜日もある。そして練習時間も長い。その練習では1対1が待っている。本気でやればこれほど練習になるものはないが、一方、サボろうと思えばいくらでもサボれる。岩渕真奈選手が取材の際に、小学生時代を振り返って、長時間続く1対1の練習を強く記憶していると語っていた。3年生になったとき、どれだけサッカーを好きになっているか、どれだけ闘争心を持っているか、これが低学年にとっての重要ミッションであると私は考えている。「あるワザができる」「あるワザが出来る子が何割以上いる」といったことではない、というのが私の考えで、これには恐らく反論もあると想像する。

7. バケることを願って

子どもはどこかでバケる。高学年でバケる子もいれば、中学や高校でバケる子もいる。小学生の間に2回バケる子だっている。YキとKロの二人を除くと、サッカーをやりに来ている子が見当たらなかった現6年。そんな学年に限って、父親軍団もほとんどおらず、「これは関前史上で最弱の学年になるか」と危ぶんだが、高学年になってバケる子が続出、久しぶりのブロック優勝をもたらしてくれた。

低学年は、バケる可能性のタネを注入しておくことが重要なのもかもしれない。そしてそれは子ども一人一人で微妙に違うものかも知れない。

以上